# 令和６年度第２回北海道立旭川美術館協議会議事録

北海道立旭川美術館協議会は、学識経験者、学校教育及び社会教育関係者、家庭教育の向上に資する活動を行う者、公募の委員で構成され、毎年度２回（通常は７月と２月）開催されます。美術館の活動について、館長に意見を述べることができる諮問機関です。

１　日　　時　　令和７年２月 14 日（金）　10 時 00 分～12 時 00 分
２　場　　所　　北海道立旭川美術館講堂
３　出席者数　　協議会委員 12 名中８名出席、美術館職員７名
４　出席委員　　伊東義晃（会長）、大石朋生（副会長）、浅野智子、阿部ひとみ
　　奥野由貴代、中村欣也、村中一徳、両瀬渉　＜敬称略 50 音順＞
５　議　　事
　(1) 令和６年度（2024 年度）事業実施状況について
　(2) 令和７年度（2025 年度）事業運営計画について
　(3) 令和６年度第１回旭川美術館協議会委員意見への対応について

【議事録（抄）】
会長の議事進行により、５の議事について、各委員に諮った。

■ 事務局より令和６年度の展覧会や教育普及活動等の実施状況と美術館評価を報告し、令和７年度に計画している事業について説明した。また、第１回旭川美術館協議会で各委員から出された意見に対する当館の対応及び検討状況について説明した。

■ 事務局からの報告、説明に対して、当館に期待することや要望について意見や感想等をいただいた。

○ 今年度の新しい参加型の試み「みんなの推し☆コレクション」は非常に画期的な取組。毎年行うのは難しいと思うので、何かの折にそのような企画があれば、少しずつでも広がっていくのはないか。
○ 学校側からすると、時間や交通手段などの関係で、美術館に子どもたちを連れてくるのはなかなか難しい。オンラインアート教室は小学校低学年のような小さい子どもたちでも取り組めることがわかった。
○ 美術館からいただく招待券を会員の知り合いの方や興味のある方に配って宣伝させていただいている。また、会員が個人的にポスターの掲示をお願いしており、旭川市内や近郊に 100 箇所くらい掲示してもらっている。
○ 売店での販売や喫茶でのコーヒー提供をしながら、「どうでしたか」とお声をかけさせていただいて、色々な御意見を聴いて、必要なところは、学芸員や美術館に引き続き伝えていきたい。
○ 遠隔地の子どもたちが芸術離れしてしまうことが気がかり。子どもたちだけで来ることはできないので、親が子どもたちを連れて来たいと思えるようなＳＮＳを発信するといいと思う。
○ ＳＮＳがあまり来場者数に結びついていないとのお話があったが、フォロー返しや

返信を行っていないのに、フォロアー数が増えているので、成功しているのではないか。

○ オンラインアート教室なども、遠くの市町村の学校にとっては、活用できる取組ではないかと思うが、今年度４団体ということで、まだまだあっても良いのかなと思う。アナウンスの方法を工夫すると活用する学校が増えるのでは。

○ 令和７年度の「新・山本二三展」や「かがくいひろしの世界展」は、中高生や小学生たちも喜ぶだろうなと思うので、ぜひ広報に力を入れてもらいたい。

○ 作品購入は難しいとは思うが、北海道の財産、旭川の財産になるものなので、北海道でも基金を設けて少しずつ積み立てて、素晴らしい財産を収蔵することで第２展示室の展覧会も充実していくと思う。

○ 科学館との連携は面白い。この前まで冬まつりもやっていたが、そういったイベントと合わせて何かできないか。教育大学の協力を得て雪像を作ったり、「食べマルシェ」のような 100 万人規模のイベントが近くで行われているので、関連する作品展があるといい。

○ 「新・山本二三展」は、イベントの時期であれば外国の方も多く来られる可能性がある。そのためには観覧料も現金だけではなく、色々な支払い方法が必要。ネットで購入する方法も必要だと思われる。美術館だけで人を呼ぶのではなく、他の力も借りて人を呼ぶことも大事。

○ ＳＮＳはなかなか難しいが、やり続けることが大事。あまり見られないとか、フォロアーが増えないとかで、やめてしまうとそこで終わってしまうので、根気強く続けてもらえたら。

○ 表千家によるお茶会が行われ、210 名の方がお見えになっている。何か「ついでに」作品をみていただくという形で鑑賞の機会を増やす、こういった取組はこれからも続けるべき。

○ 子どもの体験格差が問題になっていて、その解消に資するような、一層の工夫とか努力が必要。オンラインアート教室のように、オンラインで作品を見られるようないろいろな施策も必要になってくるのでは。

○ 協議会の委員一人ひとりもＰＲ活動していかなければならないと思っている。

○ 美術館と教育が抱える課題は似ていて、「親しみやすくしていきたい」けれども、伝統的、エレガンスや価値といったものをどの程度まで下げて大丈夫なのか、その兼ね合いが難しいところ。旭川美術館は、それが成功していて、令和７年度の「新・山本二三展」や「かがくいひろしの世界展」のような子どもたちがすごく喜びそうな展覧会と難波田龍起や砂澤ビッキのような全国規模で著名な重要な作家の中身の濃い展覧会を一緒に見られるのはなかなかない。それを紹介するための方法が問われているのでは。美術好き、あるいはジブリ好きの人たちに、どうのようにエレガンスを伴いながら広めていくのか考えたときに、ストーリーでの見せ方が重要になると思う。

○ ストーリー中心とした見せ方を考えたとき、旭川美術館が何かと考えると、旭川はオール旭川で共同的に作品を展示して、みんなで支え合っている美術館だというストーリーが出来上がると、道外の人たちには刺さる。旭川美術館は、旭山動物園や旭川市科学館、アイヌ記念館もある。そういったものを大きくまとめて、絵として、作品としてみせる美術館だと周知されて、それぞれが好きな作品を推し活、特に高

校生や大学生などの若年層に対して行う。それを例えば、ＳＮＳでリポストしてもらうと観覧料を割引するなど、来てもらった来館者にどうやって広げてもらうかという仕組みをつくれると、どんどん来館者数は増えていくのではないか。

○ 若年層をどう取り込んでいくのか、周知するためにどのようにストーリーを作り上げていくか、長期的に見たとき重要になるのではないか。

○ キーワードとして、コラボ、ＳＮＳ、オンラインやインバウンドなど出てきた。「新・山本二三展」については、コマーシャルの仕方によっては、すごい数の人が押し寄せるのではないかと思う。ぜひインバウンドの方々に来てもらえるよう、頑張っていただきたい。